
この記憶を空へ....

桃月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この記憶を空へ・・・

【Nコード】

N7684B

【作者名】

桃月

【あらすじ】

ボク、美北高貴にとって、大切な…大切な人だった。彼女の笑顔を見るだけで、心がほっとして…。…失くしたくなかったんだ、彼女を。これはボクとその彼女が描いた日々だ。そして、ボクが最初で最後に語る物語でもある。

第1話 笑顔の似合う少女

—— 熱い夏からだんだんと肌寒くなっていく季節へと変わってきたこの時……

—— 16歳を迎えた僕は、薄暗くなった空を背景に自室の天井にぶら下げたロープを見上げていた——

夏休み明け……。

二学期が訪れて、かつたるい授業の日々がまた始まった。

周りの友達や女子生徒はめんどくさい顔をして、携帯を触っていたり、寝ていたりしていた。

そんな中、一人熱心に眠くなるような授業を聞いていた人がいた。可愛らしいシャープペンを手に取り、ひたすらノートに書き込んでいる。

彼女の名前は桜田 美香。

クラスメイトの彼女は勉強もでき、スポーツも万能、おまけに容姿端麗ときたものだ。

そんな彼女はもちろん周りからの人気も当たり前のように高く、僕

もそんな彼女の事を気にかけていた。

この当時は“気にかけていた”と言っても、別に彼女に酔狂していた訳ではなく「あの子、結構可愛いな」程度にしか思っていなかった。

彼女との関係が進展し始めたのは二学期が始まって2週間後くらいだろうか？

体調を崩して学校を休んだ僕は放課後に休んだ分の授業のレポートを取っていた。

教室には誰も残っていなく、少し早い蟋蟀の鳴き声がただ聞こえてくるだけだった。

「——もう、だいぶ遅れたな」

レポートに集中してかなり終わってきたその数時間後、廊下から人の声が聞こえてきた。

すぐにそれが女性の声だとわかった。

（先生だろうか？）

いや、教師にしてはまだ若すぎる声だ。

足音がどんどんとこちらの教室に近づいてくる。

「あれ？……私以外の生徒がまだ学校に残っていたんだ？」

制服を着た女性が窓から小さい顔をちょこんと出す。

それが桜田さんだということにすぐに気づいた。

「桜田さんこそ、こんな時間までなんで残っていたの？」

「私？」

僕は首を縦に振る。

彼女は少し笑いながら答えた。

「私は部活だよ。一人残って練習していたの！」

「そうなんだ」

僕個人が桜田さんと話すのはこれが初めてだった。
なんとも素っ気無い会話だが、僕はこの時に彼女へ惹かれてしまった。

「あのッ！」

少し声の上がった僕が桜田さんに話しかける。

「もう外も暗くなつて危ないと思うから……そっちがよければ一緒に帰らないかな？」

顔が熱くなる。

彼女の方へと目を向けた。

桜田さんは少し口をあけてポカーンと微動もしなかった。
そして瞬きした後に、こう返事が返ってきた。

——なら……遠慮なくそうさせてもらっよ？——

微笑みながら整ったその顔をこっちへ向けた。

学校の窓から見える夕日を背景に、彼女の笑った顔がとても綺麗に思えた。

その時の彼女の笑顔が、まだ新鮮に今でも僕の記憶に残っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7684b/>

この記憶を空へ....

2010年10月9日13時35分発行